

特集

地域に根差したびんリユースの新展開

びんリユースシステムの維持、再構築を目指して、
地域や市場特性に合わせた循環が求められる中、
各地で地域型びんリユースシステム構築の取り組みが展開されています。

びんリユースが大きく減少する中、当協議会では、 一升びんのリユースシステムの持続性確保に取り組む。

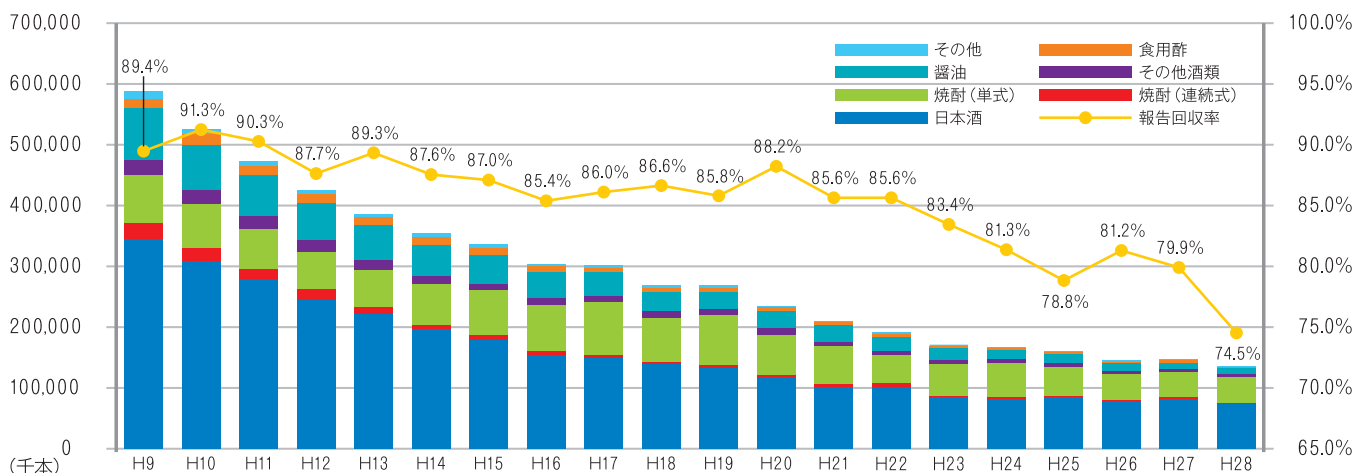
我が国におけるリターナブルびん（リユース：再使用）の流通量は残念ながら減少に歯止めがかかっていません。平成9年からの20年間で4分の1以下に減少しており、回収率も約15ポイント減少しています。（グラフ参照）要因は、「社会構造の変化（ライフスタイルの変化）」と「流通構造の変化（量販店・コンビニエンスストアの台頭）」により、消費者の購買行動が大きく変化したことが挙げられます。

このような状況に対し、当協議会では、日本固有のびんリユース

システムである「1.8L（一升）びんのリユースシステム」の持続性確保に向け、日本酒造組合中央会ほか関係者との連携を強化し、その課題を明確化した上で、①回収ルートの確保 ②回収びんの品質確保 ③洗びん時にはがれにくいラベルの改善 ④P箱での出荷比率の向上 ⑤消費者への情報発信の強化などの取り組みを行っています。

近年は、地域資源の循環利用や低炭素化を目指した取り組みとして、地域ごとのびんリユースシステム維持に向けた試みが求められています。魅力あるびんリユースの価値づくり、卸・小売業のご協力による効率的な商品流通、消費者への効果的な情報提供などに挑戦して参りたいと考えています。

■1.8L（一升）びんの出荷状況と回収率の推移（平成9～28年度実績）



グラフのデータにつきましては、下記URLを参照
<http://www.returnable-navi.com/shijo/18bindata/18bin2017data.shtml>

びんリユースの取り組み事例

横浜市資源リサイクル事業協同組合

新リユースびんを開発して実証事業を展開。
きっかけは、環境絵日記の作品「地球に優しいRビン」。

「横浜市資源リサイクル事業協同組合」では、びんリユースの循環に関わる事業者で構成される「横浜リユースびんプロジェクト」を立ち上げ、環境省の「平成28年度びんリユースシステム構築に向けた実証事業」を実施。オリジナルの新リユースびんを開発し、地産地消をテーマに掲げ、新たなリユース文化の創出を目指して事業を展開しました。

このびんリユース活動のきっかけとなったのは、同組合が毎年子供達から募集している「環境絵日記」の平成26年応募作品「地球に優しいRビン」によるものでした。新しく開発されたびんは、数多くある中でリユースびんであることが明確にわかるよう、「リユースびん」と刻印。また返却してもらうことを一番に考え、保管しやすくなるような格好いいびんではなく、敢えて「ちよいダサ」のデザインにしました。



◀環境絵日記「地球に優しいRビン」



▲新リユースびん

概要

設立：平成4年10月 組合員数：121社 横浜市内で資源回収業を営む事業者の組合 ●子どもたちから「環境絵日記」を募集 ●3Rの考え方を伝える広報誌「リサイクルデザイン」を発行

商店街と飲食店において試験販売、回収方法を検証。
地元根差した新商品で回収システムの確立を目指す。

平成28年2月12日には、みなとみらいの複合商業施設「クイーンズスクエア横浜」で、環境省主催のリユース普及イベントが開催され、「横浜リユースびんプロジェクト」のキックオフとして、新リユースびんのお披露目と、地元の企業など共同で開発した飲料を試飲用として提供しました。さらに、このイベントの翌日から、新しいリユースびん入り飲料の試験販売と回収検証がスタート。オープン市場としては商店街にあるスーパーの店頭で、またクローズド市場として飲食店のメニューとして販売し、回収調査を実施しました。

同プロジェクトでは、平成29年度も取り組みを継続。地元の農産物を使ってびん入りの新商品を開発し流通させるとともに、びんの回収システムの確立を目指しています。



▲リユース普及イベントでのびん回収



▲スーパーでの店頭販売

関東甲信越びんリユース推進協議会

概要

設立：平成26年6月

びん商を中心に、循環をめぐる様々な団体と、
山梨県でのワインびんのリユース推進を目指す。

平成26年6月20日、関東甲信越びんリユース推進協議会は、関東一都六県（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、群馬県、栃木県、茨城県）と新潟県、長野県、山梨県、静岡県の地域において、びんリユースシステムの存続および拡大に向けた活動を、自治体・消費者・事業者などと連携協力し推進することを目的として設立されました。当初は、びん商が中心でしたが、設立後、日本ワイナリー協会、スーパーマーケット協会、主婦連なども加わり、様々な団体が活動しています。

いま現在、ワンウェイびんのなかで非常に多いのは、ワインびんです。国としてもワインびんをびんリユースの象徴的な旗頭にしようと事業を推進。そこで協議会では設立以来、山梨県地方のワインびんリユースについて様々な実証事業を行っています。



▲リユース実施ポスター

地元旅館ホテルから回収し、約4500本をリユース。
Win-Winの関係を目指し、統一びん作りのための運動へ。

環境省びんリユース実証事業として3年間取り組みを行いました。1年目には地元スーパーマーケットと協力し、回収実験を実施しましたがうまくいかず、認知活動の難しさを実感しました。そこで2年目には、旅館組合と協力体制を組み、実際に消費されているワインびんのうち、使用数で60~70%を占めるびんを重点に回収し、約4500本のびんをリユースする成果を上げました。

今後、リユース活動を推進するにあたって、メーカー、消費者、回収業者、どこかが負担を強いられるのではなく、リユースに関わるすべての人たちがWin-Winの関係となるシステムづくりが重要だと言えます。

さらにワイナリー、びんメーカー、びん商連合会や消費者などの意見を取り込みながら、課題である統一びんづくりを社会の大きな運動へとつなげていきたいと考えています。



▲スーパーでのリユース告知



▲回収を終えストックされたびん



株式会社 成尾屋

概要

設立：昭和49年5月（創業：昭和26年）

●従業員数6名

●使い終わったガラスびんの回収、洗浄、配達、納品

一升びん回収の拠点作りと認知度アップへ向けて、オリジナルデザインの招布(まねぎ)を開発。

成尾屋は創業昭和26年、大阪硝子壺問屋協同組合加盟のびん商で、主に小売店から一升びん等のびんを引き取り洗浄、酒蔵や飲料メーカーに直接納品するまでの一貫業務を行っています。

現在、消費される一升びんは、リユースびんなのにゴミ置き場に出され、ゴミ収集車に投げ込まれ、割られているのを見てショックを受けました。もし酒販店、ショッピングセンター、コンビニ等あらゆる場所が回収拠点になれば、割られずにリユースできます。

その回収促進のために平成26年にリユースマークを開発、びんに貼付する認知活動を開始しました。その後、平成27年に現在の招布(まねぎ)を開発し、大阪硝子壺問屋協同組合が中心となり、酒販店等に配布。環境省の協力も得て、現在では100拠点で掲出されています。その結果、この活動により、びん回収率は着実にアップしています。



▲試作を重ねながら完成した配布用の招布

地道な招布(まねぎ)配布・掲出活動を通じて、豊かなコミュニティと持続可能な循環型社会の実現を。

この招布(まねぎ)は、自然、環境の緑をイメージし、デザインは福(お客さま)を招く、商売繁盛、千客万来の縁起物として昔からお祭りや神社仏閣で飾られていたもので、いまや店先で消費者に印象的にアピールするものとなっています。

いま日常の中で使い捨て容器が重宝される中、日本で昔から習慣的に行われていた酒販店での一升びん回収を促進、復活させるためには、招布配布を通して地道な認知活動が必要だと思っています。そして飲み終わった後、返却時に「おおきに!ありがとう!ごちそうさま!」等の昔ながらの会話を交わせること。そんなコミュニティ社会を広げていくためにも、この活動を推進していきたいと思います。そのうえで飲料メーカー、小売店、卸問屋、消費者に協力していただき、それぞれが利益を受けられる、経済と環境を両立させた持続可能な循環型社会の実現を目指していきたいと考えています。



▲視覚的にも目立つ酒販店掲示例

1.8ℓびんとP箱のリユースは、今後続く「びんのリユースモデル」です。

日本P箱レンタル協議会
会長 杉本 敏彦 氏



P箱レンタル普及とガラスびん維持存続へ向けて、日本のレンタル会社3社共同で、発足。

日本P箱レンタル協議会は、平成7年10月、日本におけるレンタル会社3社（新日本流通(株)、(株)宝永エコナ、(株)フーズコンテナ）によって、会員相互の協調のもと、P箱レンタルの普及を図り、業界の繁栄に資するとともに、業界の健全なる発展向上に寄与し、あわせて会員相互の親密を図ることを目的として発足いたしました。主な事業としては、ガラスびんの維持存続を図る事業、P箱の不正使用の中止撲滅を図る事業、全国びん商連合会の各地区びん商組合との共同事業などがあげられます。

私たちのP箱レンタルの循環システムは、2通りあります。市場から回収されたP箱をレンタル会社で洗浄、乾燥し、契約メーカーさまの注文に応じて、洗浄済みのP箱を直納する「洗箱レンタルシステム」。もうひとつは、契約メーカーさまが原則として全国びん商連合会加盟のびん商から調達する「不洗箱レンタルシステム」です。その結果、現在では沖縄県を除く日本全国で清酒・焼酎・ワイン・食酢・醤油など、3社合わせて1500社を超える契約メーカーさまにご使用いただくまでになりました。

P箱とびんが一体となった流通循環を推進し、真のリユース社会の実現を目指して参ります。

P箱のリユースは、中に入るガラスびんのリユースが前提です。P箱とびんが一体となって循環する事で成立しています。現状は自主回収認定容器の丸正1.8ℓびんの需要減少の中にあつて、回収びんの使用比率もさらに減少しています。充填先のびん洗浄機からリンサーへの変更やびん価格差縮小による新びん使用の増加、新びん使用での段ボール出荷の増加、ケース単位購入→バラびん購入への変化で回収容器の不足、回収事業者の減少などが原因としてあげられ、丸正1.8ℓびんの回収率低下という結果になっています。

そんな現状の中で、自主回収認定容器の維持存続へ向けて私たちは回収比率アップを図るために、1.8ℓびん再利用事業者協議会、びんリユース全国協議会に参加し、総合的にリユースびんとP箱が一体となって流通循環するための取り組みを推進します。また、会員会社の新日本流通(株)では、レンタルP箱不正使用防止のPR動画を作成公開しており、今後も告知活動を継続します。

1.8ℓびんとP箱のリユースは、今後続く「びんのリユースモデル」と言えます。真のリユース社会実現のために、日本P箱レンタル協議会では、今後もP箱およびガラスびんのリユースを支えて参りたいと考えております。

何げないびんに魅せられて 「庄司 太一」

びん研究者
庄司 太一 氏



はじめは、骨董屋の店先にあった小びん。
何げないびんに魅せられて、約6万本をコレクション。

1970年代後半、私が大学院生だった頃、吉祥寺の骨董屋をのぞいたときのことで。店先の売り物にならないガラクタの中に、気泡があつてちょっとゆがんだ小さなびんを見つけました。そのびんを拾い上げたときに、自分が子どもの頃は、このような手作りのびんに囲まれていたことに気づき、当時のことがよみがえってきました。それが運命的なびんとの出会いなのですが、そのびんが何のびんなのか、どのようにして作られたのかも、まったく分かりませんでした。

それで、びんのことを知りたくて、こつこつと集め出したのです。集めたのは製びん機により大量生産されるびんではなく、主に明治から昭和初期にかけての手作りのびんでした。現在、自宅の庭に作った「ボトルシアター」には、約6万本のびんを展示しています。



▲ボトルシアター

「原色日本壺圖鑑」の制作は、私のライフワーク。
びんには人を癒やしたり慰めたりする世界がある。

実は、私は博物学が好きで、子どもの頃は枕元に図鑑を置いて寝たような少年でした。びんは自然物ではないのですが、びんのことを解説している本があつたらいいなあと思い、自ら図鑑を作ることになりました。それが「原色日本壺圖鑑」で、この図鑑の制作が私のライフワークとなっています。

最近思うのですが、光に当たってキラキラ輝くガラスびんは、人を癒やしたり慰めたりする世界をもっているのではないかと。ガラスびんメーカーの方々が、ひたすら一生懸命作ってきた無心のびんが、何げなく生活の道具として使われた後、空きびんとなって、ある時は人の心を癒やしたり慰めたりする存在になっているということを、私は声を大にして言いたいですね。



▲「原色日本壺圖鑑」

Information お知らせ

「3R推進団体連絡会」主催の 「第12回容器包装3R推進フォーラム」を開催。

「3R推進団体連絡会」主催による「第12回容器包装3R推進フォーラム in 日本橋」が、10月4日(水)に中央区の日本橋公会堂にて、「持続可能な容器包装の3Rを目指して」というテーマで開催されました。

東北大学環境科学研究科教授/研究科長 吉岡 敏明氏による基調講演「持続可能な社会に向けて～新たな価値創造と自然環境のあり方～」に始まり、経済産業省・環境省・農林水産省による「国からの報告」、さらに開催地自治体の中央区などによる3Rの取り組みの「事例報告」がありました。

最後のパネルディスカッションでは、基調講演をされた吉岡氏の他、3R推進団体連絡会、事例報告者が壇上に上がり、会場参加者との間で活発な意見交換が行われました。



▲3R推進団体連絡会活動報告



▲パネルディスカッション

福島県環境創造センター交流棟「コミュタン福島」で、 幸事務局長によるエコロジー講演会「びんを学ぼう」を開催。

10月15日(日)に、福島県環境創造センター交流棟において開催された「コミュタン福島 秋の祭典」におけるエコロジー講演会で、当協議会の幸事務局長による「びんを学ぼう」というテーマで講演。家族連れを中心に約50名の参加がありました。

講演の内容は、ガラスとガラスびんの歴史に始まり、ガラスびんの魅力とガラスびんの3Rについて分かりやすく解説。途中びんのリサイクルの紹介では、ムービー「大好き! ガラスびん 何度でもびんtoびんリサイクル」を観ていただきました。



▲コミュタン福島 秋の祭典



▲エコロジー講演会

